

<エッセイ>

万博という絶望と希望らしき何か

EXPO 2025: An Experience of Despair and Something One Might Call Hope

野村将揮*

Masaki Nomura

I. 万博という絶望

1. 「国家的記憶」から取り残された二人の女性
2. 理念の有名無実化と、果たし得たメタな開催意義

II. 万博という希望らしき何か

1. 大屋根リングという個々の記憶
2. “null²” の諦念と絶望、あるいは一縷の信頼
3. 「いのちの未来」を支える人間的側面
4. “Better Co-Being” という信仰と祈り、あるいは希望

III. 結語

I. 万博という絶望

万博には絶望した。

1. 「国家的記憶」から取り残される二人の女性

二人の初老の女性が大屋根リングの下に座って休息を取っていた。ほとんど汚れの無い白いスニーカーは二人お揃いで、今日のために一緒に新調したらしい。科学ってすごいよねえ。そうだよねえ。でも、予約がよくわからないよねえ。並ぶのも暑いしねえ。どうしようかねえ。そう言いながら、事前によく準備したことが傍目にも分かる、書き込みだらけの会場地図を寂しそうに見つめていた。

万博会場の雰囲気それ自体を楽しめる無垢な人たちを非難したいわけでも、様々な制約の中で尽力してきた人たちを糾弾したいわけでもない。しかしながら、この二人は、控えめに言っても、取り残されていた。万博という催事、そして、万博という美化された記憶を今後も占有していくであろう「万博界限」から。

私自身、会場を訪れる1週間前と3日前とに、パビリオン予約のために何時間もディスプレイと対峙した。結局は一つとて予約が叶わず、残ったのは眼と首と手首と腰の鈍痛だけだったのだが。

* ハーバード大学大学院

当日予約で目当てのものを概ね回ることが叶いはしたが、それも、炎天下の会場内でスマホの画面と睨めっこし続けた数時間もの時間と体力、そして、その間に得られたはずの体験の犠牲に依る。人生で最も無駄な時間の一つだったことは疑いない。

だが、事態は、こんな友人同士の愚痴程度の話で終わられるものではない。直裁に言えば、この苦痛や徒労を経ることなくコネやらツテやらで広義の「関係者」として万博という特権的体験を享受した者たちの万博評を、われわれは決して鵜呑みにしてはならない。そもそも、これらの「関係者」が万博を真正面から批判すること自体、決して容易ではないだろう。こういった歪みの蓄積を看過すれば、大袈裟でなく、国家的記憶の捏造を許容することとなる。大阪・関西万博は連日大盛況でした。遠くない未来において敷衍されるであろうこの種のナラティブによって捨象されるものこそが、本来的には、「いのち輝く未来社会」の主たる構成要素にほかならないのではないか。あの二人の初老の女性にとっては、白いスニーカーを選んだ時間までもが、万博会場での真・当な体験に支えられさえすれば、人生でも稀有な記憶に昇華され得たはずである。言わずもがな、この失われた未来の記憶は、上記のナラティブには内包されていない。

2. 理念の有名無実化と、果たし得たメタな開催意義

各国パビリオンは、どう好意的に見ても、全体のテーマやコンセプトを踏まえているとは思えない展示に溢れていた。万博とは毎回そのようなものだという反駁も容易に想像できるが、そうであるにせよ、その悪習を断つ、或いは緩和するための努力をどれだけ重ねられたのだろうか。件のテーマやコンセプトが日本人作家によるシグネチャーパビリオンには通底するものだと主張するなら、それは賢い小学生でも看破するであろう論理のすり替えに思われてならない。そもそも、テーマやコンセプトを体現し人類社会に提示するための舞台装置が今次の万博だったはずであり、その逆、つまりは、舞台装置ありきではないはずだろう。理念の有名無実化を避けるための努力を当初から諦め、開催そのものが自己目的化されていたくらいは無い（なお、日本社会がこういった倒錯に溢れていることは、私自身も行政官の経験から痛切に理解している。）。

この文脈において、あくまで一例ながら、フランス館がそのようなブランド陳列会をやったのけたことの意味を、われわれは深く噛み締める必要があるのではないか。フランス館の関係者の目から見て、この万博ひいては日本という国は、どういうものだと思われていたのだろうか（ドバイ万博では国立公文書館から『百科全書』が特別に貸し出されるなどしたと聞き及んでいる。）。スポンサーとの関係をはじめとする無数の制約があることも想像はできる。ブランドなるものの位置付けや意味合いも文化圏ごとに異なるだろう。しかしながら、さすがに、「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマから大きく乖離していなかったか。或いは、あの種のブランド品の山でわれわれのいのちが輝くというメッセージなのだろうか。フランス館の固有テーマは「愛の讃歌」とのことらしいのだが、あれがわれわれに対する愛またはその表明のあり方なのだろうか。

コモンズ館は、その場では、これまで想いを馳せたことの無かった国々の文化や風習に触れる良い機会だと強く感じた。日本で工芸や民藝と呼ばれてきた営為がほかの文化圏にも異なる様式で成立し受容されてきたという当然の事実を改めて教えてもくれる。しかしながら、俯瞰してしまえば、その多くが一様に観光誘致とサステナビリティ大合唱の構えを呈していた。一体、誰があの国々を

何に求心してしまっていたのか。この点を考えるにつけて、件のテーマやコンセプトが担い得た役割が思い遣られてならない—これらの方向性を互いに暗黙に前提してしまえる現在の世界の力学や構造を省み、内破した上で、より健全なあり方をともに問うことで新たな形の協働の端緒とする、そんな未来に向けた理想や理念の提示ひいては共有たり得たのではないか。

フランス館やコモンズ館を例に上記で指摘した点を「各国の自主性に委ねている」といった類の文句で躲そうとするなら、それは開催意義の何たるかを放棄しているに等しいだろう。このような暗黙の責任放棄の総体こそが、すでに述べた理念の有名無実化と併せて、根強い万博不要論を惹起する一因だったのではないか。そして、まさに万博不要論を支えた不毛な揚げ足取りに代表されるように、時勢が崇高な理想や理念の共有を困難にし続けているからこそ、万博という大仕掛けは、これに抗うというメタな開催意義を果たし得たのではないか。

Ⅱ. 希望らしき何か

万博では希望らしき何かも垣間見えた。

1. 大屋根リングという個々の記憶

大屋根リングはとても良かった。海風に乗ったほのかな木の香りが鼻腔を掠めるその都度、会場の導線設計の工夫が思い遣られた。日没後、リングの上を歩きながら夜空と一体となってさまざまな風を感じたひとときは、まぎれもなく私の万博経験のハイライトだった。

太陽の塔が会場中央に屹立していた 70 年万博に対置され得る今回の会場の脱中心性は、聞き及んだ当初は安直に過ぎるようにも思われたが、実際に訪れてみれば、ほとんど更地にあの規模の円を木材で造ろうと構想したことに、素直に脱帽せざるを得ない。リング上から見た夜景を覆うテーマパーク染みた電光には微塵とて「いのちの輝き」を見出すことができなかったが、それでも、こんな時代に多くの国々がひとつの円の内に集えたことの尊さは揺らがない。

数十年先も、私を含む多くの人々がふと今回の万博を思い返すにつけて、あの大屋根リングの様相を、そこで見たさまざまな表情を、そして、その表情を撫でた風を、微笑を湛えてそれぞれに想起することだろう。太陽の塔とは別種のこの象徴の在り方は、もっと高く評価されるべきだと思われてならない。

2. “null²”の諦念と絶望、あるいは一縷の信頼

落合陽一氏による“null²”。およそ見たことが無い、有機物と無機物のあいだらしき何物/何者かが脈動するその様相は、大変興味深いことに、存在論的不安よりもむしろ原始的なものへの回帰による安堵にも似た感覚をもたらしてくれた。二元性を超越した極致たる空/null への回帰からの現実への再回帰は井筒俊彦を、また、実写や文字の用法、ひいては、多少無理をして読めば最後の歓待に至るまでもが庵野秀明を、それぞれ彷彿とさせたが、この種のオマージュ解釈は枚挙に暇が無いのでここで止める。解体される（ことが一応は期待されている）自己の経験を客体化する設計も巧みではあった。

他方で、露悪的とも捉えられ得るディストピア的演出と、これと相補的な皮肉染みた啓蒙的態度は、当然に自覚的に織り成されたものであるにせよ、それらが方法として実際に鑑賞者の啓蒙に成功していたかと問われれば幾分も疑念が残りはした。同様に、ハイコンテキスト性それ自体の自己目的化の有無や程度も、一度の鑑賞では判断できなかった。そもそも、大半の鑑賞者が「よう分かんかったけどなんかすごかった」で終わることが容易に想像できる中で、氏が本当に啓蒙を志向していたのかも推し量りようが無く、実際に、鑑賞者一般に対する根深い諦念、ひいては絶望も随所で感得されはした（なお、このような諦念や絶望の中で生きていられることそれ自体もまた稀有極まりない資質であることは付言しておきたい。）。

“null²”という体験を介してわれわれは、この日本社会の同時代性を一身に引き受けてきた氏をこのパビリオンの完成にまで至らしめたもの、すなわち、人間全般への一縷の儚い信頼を垣間見ることでもある。そして、氏が、それこそ空/null がごとく自意識を超えてこの信頼に身心を捧げることができていたのだとすれば、その存在は、少なくとも社会にとっては、ひとつの稀有な希望であることは疑いないだろう。

3. 「いのちの未来」を支える人間的側面

石黒浩氏の「いのちの未来」。総じて、努めて理知的で、また、抑制的であった。テクノロジーに対する浅薄な礼賛でも根深いニヒリズムでもなく、不要に教条的でもない。否、むしろこれらを意識的に忌避している繊細さには、素直に敬意を抱かざるを得ない。

一見すると単純なストーリーには、たとえば、「とても近いと思います。」という件の何気ない一言に代表されるように、繊細な配慮と深い思索が随所に込められている。何より、出口に掲げられた端的な言葉も、この配慮と思索を回収することに成功している。ひいては、この回収に触れることで得られるある種のカタルシスこそが本パビリオンの真髄と言ってもいいだろう。この前提で振り返れば、最後の展示の特異性もあって、改めてひとり静かに賛頌したくなる。

総じて、氏がまさに体現したように、人間の何たるかを考えるという営為の基底を設計者の人間的側面が支えるということの重要性が、改めて痛切に思い遣られた。なお、最後の展示が敬虔な宗教徒の目にはどう映るのかは、純粹に興味が湧いた。

4. “Better Co-Being” という信仰と祈り、あるいは希望

宮田裕章氏の“Better Co-Being”。ひとえに殊勝だった。目の前のオブジェクトの向こうに、緑があり、空があり、そして他者がある。そして、オブジェクトが無くとも、視界に入らなくとも、常にこれらは自分ともに在る。そんな当然ながらも忘れがちな、とても重要なことに目を向けさせてくれた。

さまざまな言葉と文化が子どもでも分かる平易さで説明される中で、子どもも大人も想像力を拡張されていく。こういったシンプルな方法で自身に内在する他者性を拡張させられる経験というのは、意外に思われもするが、世に決して多くはない。

テクノロジーで身体性を拡張して自他の境界を超えていくという主題はすでに世に一般的ながら、その方法の考案と実装にはまだ多くの可能性が残存している。本パビリオンは、予算や場所など無数の制約がある中で、身体性への回帰が一それも、他者と共有される仕方で一現実的に実装されて

もいた。本パビリオンを出た後も体験を持続させ接続し続けることを企図した設計も見事（費用内訳を想像するにつけて、驚嘆せざるを得ない。）。

何よりも、あれほどまで純粋に鑑賞者を信頼した上で、ポジティブな未来への展望を提示し、そこへの参画を促す態度は、最高の賛辞として、まさにひとつの思想であり祈りであると言って差し障りないだろう。そして、この種の思想と祈りが世界に残存していること自体が、われわれにとっての最たる希望にほかならない。世界が美しいと信じられる、素晴らしい体験をさせてもらった。

Ⅲ. 結語

思いつくままに露悪的に書き綴ったが、本稿で触れた「国家的記憶」形成の誤謬や理念の有名無実化は、過日の参議院議員選挙を例として挙げるまでもなく、現在の日本社会で数多見出せる同時代的課題にほかならない。もとより責任の所在が曖昧なまま物事が進んでいく日本という言語圏/文化圏においては個別の主体に対して真つ当に責任を問う議論が成立しにくいところ、上記の課題は時勢によって深刻化を見てもいる。しかしながら、だからこそ、今次の万博に関する健全な言説が会期中においてこそ増えていくことを、絶望の中で祈っている。この祈りをこの期に及んで保持できることこそが、どうやら希望らしき何かであるのだと儚く信じながら。

